

音楽や歌を用いた「子ども相互および保育者と子ども間でのイメージの共有による遊びの展開」における一考察

A Study on the Cases What Children and Early Childhood Teachers Developed Play through the Sharing of Good Image, especially When Using Music

山本 学、カタヴァ 美紀、田代 千早、原川 洋子、八木 名菜子
山田 美穂子、鷺巣 貴乃、鈴木 慶子

YAMAMOTO Manabu, KAHTAVA Miki, TASHIRO Chisa,
HARAKAWA Youko, YAGI Nanako, YAMADA Mihoko,
WASHIZU Takano, SUZUKI Keiko

Summery

This study is consideration of the Cases what children and early childhood teachers developed play through the sharing of good image, especially when using music.

As a result, there were sharings of good image in the cases using music. The sharings of good image were meditating on words, movings and objects in children mutual. And They were meditating on environmental compositions and image mediations.

要旨

本研究は、子ども相互や保育者と子ども間でのイメージの共有による遊びの展開のうち、音楽や歌を伴う遊びの中の展開について、事例から考えることを目的とした。

事例を収集し、考察をした結果、音楽を伴わない遊びの展開と同じく、音楽や歌を伴う遊びが展開されるときにもイメージの共有が見られた。また、イメージの共有の媒介として表れるものは、子ども相互では、発話、動き、ものが見られ、保育者と子ども間においては、環境構成、イメージの代弁・仲介が見られた。

I 研究の背景

1 保育の内容と理解

「保育士養成課程等の見直しについて」に別添1とされた「保育士養成課程を構成する目標及び教授内容について」1)に記載された新しい科目「保育の内容と理解」に関する科目の目標には「子どもの生活と遊びを豊かに展開する」と記された。この科目は、「基礎技能」、「保育の表現技術」と変化してきたものである。今回、新たに科目名が「保育の内容と理解」となるにあたって、この「子どもの生活と遊びを豊かに展開する」ことについて考察したいと考え

た。まず、「遊びの展開」とはなんだろうか。

2 遊びの展開は、イメージの共有によって行われる

松本（1996）2)は、4つの事例を紹介し、「イメージの共有が遊びを展開させる」と指摘している。

また、向（2017）3)では、4、5歳児の共同遊びの18事例から、遊びの展開とイメージの共有を、「過去の共有された経験」を元にしていて、遊びの最初から共有しているイメージ、遊びの途中で共有されていくイメージ、遊びの途中で新たに提案され共有されていくイメージがあるとしている。遊びの展開にイメージの共有は必要なのである。それでは、「イメージの共有」は何によって行われるのか。

3 イメージの共有は、発話、動き、物を媒介として行われる

宮田（2013）4)は、3歳児の積み木遊びにおいて、遊びの行動の質の変化を、目的の出現と相違の時期、イメージの相違と共有化に向かう時期、協働の3つに分けられるとし、特に第二期のイメージの相違と共有化に向かう時期では、子どもはイメージを言語化することによって共有しようとすることを事例から述べている。

また、砂川（2002）5)は、遊びの場を共有しながら、「他者と同じ動きをする」という同型的行為が子ども同士の仲間意識の共有に関わっていることを示している。齋藤（2012）6)は、1～2歳児では、「仲間が使っている物」への関心が高く、仲間意識との関わりにつながっている可能性が示唆されるとしている。

これらを横断的に、年齢ごとで調査したのが、藤塚（2011）7)であり、3歳児では、場の共有が遊びの展開に影響するが、5歳児になると既設のままごとコーナーの利用が減ることを示している。これは、友達と一緒にイメージを共有できているからだとして藤塚は述べている。また、4歳児では、共通の動作が大きく遊びの展開に影響していたとし、仲間との関係で自分のイメージをどう表現するかにエネルギーを注ぐ姿が見られたとしている。

このような先行研究が示すように、子ども同士のイメージの共有は、発話、動き、物を媒介としていて、またそれが遊びの展開へとつながっている。

4 保育者と子どものイメージの共有は、環境構成、イメージの代弁・仲介

ここまでは、子ども同士のイメージの共有だが、保育者と子どものイメージの共有、つまり保育者の援助についてはどうだろうか。藤塚（2011）7)は、3歳児は遊び空間を自分で作ることができないので、保育者が環境構成を整えること、また保育者が子どものイメージを代弁、仲介に入ることによってうまくいったと報告している。4歳児はグループで、ごっこ遊びを楽しむようになり、それにあう材料などを準備すること、5歳児では、子ども相互の意見の調整しあう場を作ることが大切だとしている。

5 音楽活動における「遊びの展開」

子どもは日常から、多くの歌や、手遊び、ふれあい遊び、遊び歌に親しんでいる。これらの実践をイメージの共有と結びつけて考えたときに、秦、梶間（2017）8）では、「保育現場でのうた遊びの定型化」により、それぞれのうた遊びの内容に慣れてしまい、子どもの表現を引き出すことが難しくなっていると指摘している。しかし、松原（2016）9）では、児童養護施設に措置されている被虐待児を対象に、約8カ月にわたり、計20回の音楽遊びを集団で実施した結果、音楽遊びは被虐待児の傷ついた社会性を改善し、閉ざされた心を開くのに一定の効果があることが明らかになったと報告している。この報告では、歌を使ったあいさつ、リトミックなどの音楽に即時反応する活動、音楽に合わせて体を動かす。音楽を伴ったパネルシアターなどを実施している。このように、大人が与える形の音楽活動でも、社会性を育むことに効果が見られている。

保育者が子ども相互や保育者と子ども間でのイメージの共有による遊びの展開を支援することには、一定の示唆が与えられているが、これを音楽活動に焦点を当ててみると、その支援や方法にはまだ改良の余地があるように思われる。しかし、本テーマは広大なテーマであり、まずは現状の実践の中での、イメージの共有の萌芽について考察したい。

そこで本研究の目的を、子ども相互や保育者と子ども間でのイメージの共有による遊びの展開のうち、音楽や歌を伴う遊びの中の展開について、事例から考えることとする。

II 研究方法

1 対象

子ども相互、または保育者（本研究では保育士、幼稚園教諭免許の有資格者に限らない）と子ども間で展開された音楽や歌を伴う遊びの事例

2 方法

研究対象の事例を紹介し、それに対してどのような遊びの展開が見られたかをイメージの共有の視点に立ち、考察を加える。

III 結果と考察

1 静岡市S幼稚園における「音の風景を作ろう」実践（文責：山本 学）

事例

2016年11月13日、筆者含む保育者志望の学生3名は、「音の風景を作ろう」を題材とし、静岡市S幼稚園において保育の実践をした。ねらいを「日々あまり触れることのない楽器の響きに親しみ、音のイメージを感じる」とし、トーンチャイム、鈴、タンバリン、ツリーチャイム、ドラムセット、カスタネ

ットを用意し、音のイメージからどんな風景が作れるか話しながら、活動を進めた。トーンチャイムをみんなで鳴らしてみる活動の時には、部屋の端に行って鳴らす子ども、中央で円になって順番に鳴らしてみる子ども、大小取り替えて楽しむ子どもが見られた。様々な音が一度になり、部屋は混沌とした状態になったが、筆者は「ドミソ」に赤、「ドミㇼソ」に青、「ファラド」に黄、「ソシレファ」にピンクのビニールテープを貼っておいたところ、テープに気がつく子どもが出てきた。そこで、筆者は子どもたちに「赤の色の人だけ鳴らしてみよう」と声をかけ、鳴らしてみたところ、子どもたちから「きれい」と声が上がり、その後、子どもたちは自分たちで他の色も鳴らして遊ぶ遊びに展開していった。

考察

イメージの共有における、子ども相互のイメージの共有の「物」の媒介と保育者と子ども間における環境構成、イメージの代弁・仲介（活動を展開させるための促しとして）が見られた。トーンチャイム以外でも、鈴を振って「雪が降っているみたい」などイメージを想起させる発語が子どもたちから表れていた。

2 児童合唱指導におけるボールを使った息の運び（文責：山本 学）

事例

東京都にあるT音楽教室の合唱指導を行っている筆者は、発声の際、息の運びを子どもにイメージさせるために、ビニールボールを使っている。「ラソラ」のわらべうたの旋律で子どもの名前を歌い、同時に優しくボールを投げる。それに対して、子どもは同じ音程で「はあい」と投げ返す。例年4月は特に低い音を地声で歌ってしまう子どもたちがこれを毎行行うことで、息の流れを伴った響きのある声で歌えるようになっている。

考察

イメージの共有における、保育者と子ども間における環境構成が見られた。また、子ども相互ではないが、物（ビニールボール）が媒介となって保育者が出してほしい声のイメージを伝える役割を果たしている。

3 手遊び歌における絵本の読み聞かせを併用した活動（文責：鷺巣 貴乃）

事例

静岡市内での親子（1歳児から3歳児対象）の音楽遊びの会を行っている筆者は、遠足、ピクニックシーズンにおにぎりが出てくる手遊びを歌う際におにぎりが載っている絵本の読み聞かせを行っている。

最初に手遊びをやって見せてもあまり集中しないが絵本を提示すると注目し、近くに寄って来て絵を指さしたり触ったりする。そして、一緒に手遊びをすることはじめは歌に合わせて動きをまねるだけであるが、数回行ううちにイメ

ージが広がり、好きなおにぎりを聞くと「しゃけ!」「たらこ!」などのほかに「チーズおかかおにぎり!」など家で食べているお気に入りのおにぎりを教えてくれたりする。また、歌が終わると作ったおにぎりをぱくぱくと食べるしぐさをする子ども、お互いに「どうぞ」と渡す親子、「おなかすいた」と本当におなかがすいてきてしまう子どももいて、さまざまな表現が出てくる。

考察

音や動きだけでなく共有される視覚的要素も加わることでイメージがふくらみ、自らの体験や経験をもとにした発語やしぐさの幅広い表現につながっていくと思われる。

4 浜松市内の保育園（2歳児～6歳児対象）における「音楽リズム遊び」の中で（文責：田代 千早）

事例

保育者のピアノ演奏（キラキラ星によるリズム変奏曲）に合わせ、子ども達が教室内を行進している。突然演奏を止めると、子ども達もピタリと動きを止めた。演奏を再開すると、再び行進を始めた。この、ピアノ演奏に即時反応する活動を繰り返していく中で、保育者が「あか」と言葉を発するのと同時に、演奏を止めることを試みた。すると動きは止まり、すかさず子ども達の中から「あお!」という声が上がった。それを受け演奏を再開すると、皆でまた行進を始めた。回を重ねていくうちに、今度は他の子どもが「きいろ!」と叫んだ。そこで保育者が「さあ、どうしよう?」と投げかけると、叫んだ子どもがいきなり体を激しく動かし始めたので、他の子ども達も一緒に体を動かした。保育者も同調し、ピアノを激しく弾き鳴らした。收拾がつかない状況になったので、「あお」と言って元の演奏を再開した。子ども達はピアノに合わせ規則的に行進を始め、落ち着きを取り戻したので、タイミングを見計らい終了した。

考察

イメージの共有により、保育者と子ども間における環境構成、イメージの代弁・仲介が見られた。保育者が「あか」と言葉を投げかけたことで「あか（とまれ）」＝信号機のイメージが子ども達と共有され、子ども間においては、共有の媒介として、発話、動きが見られた。

この事例においては、保育者と子ども間においても、発話が媒介となり、イメージを伝える役割を果たしている。

5 大きな青い布(約3×5 m)を海に見立てた遊びの展開(文責：原川 洋子)

事例

筆者は音楽講師三名で知的障がい児のグループ音楽活動を平成20年より継続して行っている。参加者は保護者の依頼で集まった重度から軽度の知的障がい児6～8名程度である。

青、緑、ピンクの三色の布を対象児に提示し「今日はどの色にしようか？」と問いかけると対象児 A から「青」と返答があり、他の対象児から「何の色かな？」「海」と発語があった。その後、広げられた青い布の四方を対象児と指導者で囲んで持ち、海のイメージのピアノ伴奏に合わせて、身体を揺らしたり腕を上下させたりして全身を動かす活動を行った。伴奏者は、最初は揺れるような穏やかな 3 拍子の音楽から始め、次第に音域を拡大し大波を感じさせる音楽、さざ波をイメージする小刻みなリズムの音楽を対象児の様子を見ながら演奏し、最後に、また穏やかな音楽へと展開した。音楽のイメージに沿って身体を動かすと皆が持った大きな青い布は、穏やかな海から大波へ、それからキラキラ輝く波間へと変化したように感じられた。対象児の中には皆が動かす布の下に入って音楽の変化に伴った皆の動きや布（波）が揺らぐ様子や空気の流れを体感し楽しむ者もあった。

考察

本事例では大きな青い布(物)を何に見立てるか指導者が対象児の発語を促している。対象児の「海」という発語で海のイメージが共有されただけではなく、波や海の状態をイメージする音楽が加わることで、音楽に合わせた身体の動きを引き出し、よりリアルな海のイメージが共有され楽しく活動が展開された。また、一枚の布を皆が持つことでゆったりした動きから大きな波リズムカルな波へ、音楽に合わせたイメージの共有が出来た。伴奏者は対象児の様子や動きを観察しながら生演奏で波の状態を感じる音楽を展開することで、対象児からも自然に動きを引き出されメリハリのある楽しい遊びが展開した。

6 音具やギロを用いた音の質の違いにより身体の動きも変化した遊びの実践 (文責：原川 洋子)

事例

リトミックのストップ&ゴー（音楽に合わせて歩行したり走ったり止まったりする）の活動のストップの時にギロや太鼓の打楽器や音具のカタカタやクラクションを鳴らし、音のイメージでポーズを取ったり身体を動かす活動を行った。

使用する楽器は指導者が一つを選び、最初は指導者が音を出して皆でポーズを取った。ある程度活動に慣れてきたところで、対象児が順番に音出しの担当になった。対象児の中には自由な表現が得意な子と苦手な子が居るが役割を交代することで他者の動きを見たり、自分の出す音で他者が反応してくれたりすることに楽しさを感じている様子も伺えた。音具のカタカタを使用した時は連続したカタカタカタ・・・の音でC君がロボットのようなぎこちない動作をすると皆も真似をして動いた。クラクションの音具で「プファッ」と音が鳴ると、音に吹き飛ばされたように動くなどの表現も見られた。

考察

単発音や持続音、音の質の違いによる「音のイメージの共有」でピアノによ

るメロディが伴った音楽とは違った豊かな表現が見られ遊びが展開した。対象児も音出しの役割を担うことで主体的な参加が可能となり他者との相互の交流も見られた。

7 いわゆる問題行動を遊びに利用した実践(文責：原川 洋子)

事例

多動児のB君は指導者の指示が入り難く室内を走り回り静的な活動への参加が難しかった。そこで、B君の動きを利用し、床に置かれた2本のロープを橋に見立て歌に合わせて渡る活動を行った。

フランス民謡のアビニョンの橋の上のメロディでB君や他の対象児の動きや行動を指導者が替え歌にし「〇〇ちゃんを通る」「みんなで通る」「歩いて通る」「走って通る」「広い橋を通る」「狭い橋を通る」「一緒に通る」等のように色々なバリエーションで、B君や他の対象児の様子を指導者が言語化して替え歌で遊びを展開し楽しんだ。

考察

多動児のいわゆる「問題行動」も「橋を渡る」イメージを共有することで遊びの展開に役立った。

8 「ぞうさん」に見る子どもたちの遊び(文責：山田 美穂子)

事例

2018年3月7日、筆者の主催する童謡の会における1歳から3歳の9人の子ども達の様子から考える。

用意した10数曲のリストから1人が「ぞうさん」を見つけ、知っていると呼ぶと、他の子どももそれに倣い口々に「知ってる」と連呼した。この日予定していた「ぞうさん」の曲順は後半であったが、先に歌いたいと言う。実際に歌い始めると、どの子どもも最初は母親が歌うのを見つめながら恐る恐る歌い、次第に母親から視線をそらし、声も大きくなっていった。また、会の終わりに筆者が「もう一度『ぞうさん』歌おうか」と声をかけると、子ども達はそれぞれ遊んでいた場所から「うたうー」と言って集まり、1人が腕を象の鼻のように降り始めると、数人が真似をした。そして会の終了後、筆者が使っていたキーボードを子ども達に開放すると、「ぞうさんひく」と言って音を探す子どもが現れた。音は全く違っていたが、リズム(J. ♪♪)はほぼ合っていたため、筆者が「ぞうさん弾けたね」と言うと本人は満足そうであったが、近くにいた他の子どもも注視する、自分でも弾こうとするといった反応が見られた。

考察

イメージの共有における、子ども相互の発話、動きの媒介と、保育者と子ども間における環境構成及びイメージの代弁・仲介が見られた。

今回、子ども達の大半と保育者となる筆者は初対面であり、子ども同士でも9人の内2人が“知らない子”の状況であった。もしもこの子ども達に既に面識があり、仲間意識を共有する集団であれば、これらの展開はより早く、顕著なものになっていたと考える。

9 音を階段に見立てて歌う（文責：鈴木 慶子）

事例

東京都にあるS幼稚園の合唱指導では、指導者が、子どもたちが音程を確実に取れるようにするために、音を階段に見立てて、手の動作で音の高低を表現し、その階段に声をのせるように歌うことを指導していた。メロディに音の高低差があり、音程を取るのが難しい合唱曲だったが、子どもたちにイメージを伝えることによって、音程を意識して歌えるようになっていた。

考察

イメージの共有における、指導者と子ども間における環境構成が見られた。ただ音程を指導するだけではなく、イメージを伝えることによって、子どもの発声の仕方に変化が出た。

10 小学生ピアノ学習者における「音の振動を見る」実験（文責：カタヴァ 美紀）

事例

2013年8月、筆者及び小学生ピアノ学習者1名は、理科で習得した知識「音は空気の振動により伝わる」を利用し、理科実験を行い振動を目で見える化した。実験方法は、大きな鍋口に黒いビニールをピンと張り、その上に塩を均等に撒いた。そして撒かれた塩が周りで音が鳴るとどのような変化をするかを観察した。まず、直接塩に息がかからないように少し離れたところから「あー」と声を出すと、塩は動き出して鱗のような模様になった。次に、ピアノを使い、様々な高さの音で塩の動きを観察した。低音を鳴らすと、塩の動きは少なく大まかな鱗のような模様になり、高音を鳴らすと細かい鱗のような模様になった。これらの事から音が鳴ると空気が振動する事、音の高さにより振動の仕方が違う事がわかり、演奏時の音のひびきに対するイメージを一層高めた。

考察

イメージの共有における、保育者と子ども間における環境構成が見られた。イメージが漠然と捉えられていた音のひびきは、しっかりと空気の振動によって聴衆者に届けられていることを目で確認でき、演奏方法の工夫を考えるきっかけになった。また、音楽表現の為のイメージづくりは多岐にわたる経験と知識が役立つといえるだろう。

11 コンサートにおける発話と弾き真似（文責：八木 名菜子）

事例

平成28年9月9日（金）午前10時半から、藤枝市藤枝地区交流センター集会室において「きく うたう あそぶ ねる？～こどもとひたる音楽の時間」と題して、0歳から5歳児の親子を対象に、ヴァイオリンと歌のピアノのコンサートを開催した。

広い板の間のホールに、直接座れ、寝転べるようにクッションマットを敷き、好きな場所で自由に聞きながら遊んでもらうよう、開演時に引率者に対し、「しーっ」「ダメ」を禁止するお願いを伝える。

演目は誰もが知っている名曲に、絶妙な歌詩が添えられたものと原曲を交互に演奏していった。曲の色彩感やリズム、テンポによって走り回る速さや、ステップが変化し、舞台上の進行にどの年齢も如実に反応を示した。最も顕著な反応は、絵本の読み聞かせに曲を当てはめて演奏した際であった。絵本は連続性のある擬音と猫の鳴き声のみで進行する特徴があり、それぞれに添うように曲を当てはめ、読み進めたところ、言葉が揃い始め、メロディが付き、驚くほど協調することに夢中になっていた。読み終わるとどうしてももう一度聞きたいという子どもたちがほとんどで、その場で直ぐに再演し、さらに声や同調が顕著になっていった。また、筆者がヴァイオリンを演奏しているのに合わせ、腕を真似て動かし始めた子どもも多々見られた。この反応は、テンポの速い曲に顕著に現れていた。初めて、ヴァイオリンを見たはずだろうに、楽しそうに動きを真似している姿が印象深かった。

考察

普段着でゆったりリラックスした引率者と一緒だという安心感から、身体がのびやかに動き出し、聞こえてくる音楽に全身で反応して楽しんでいた。初めての環境、観客でも怖がらずに音を楽しめるよう、演目にも配慮したのが功を奏した。また強制的なことはせず、あくまでも自由意志での参加としたことも、子どもの興味や好奇心を刺激し、教えていないのに、声や音程がそろとうと楽しい、嬉しい、気持ちいいと感じるようであった。失敗して飛び出してしまったり、音程が外れてしまったりしてもそれを楽しめるような雰囲気でもあった。特に、年齢の高い子どもにその傾向が見られた。

そして、ヴァイオリン演奏に合わせて弾く真似をしていた子どもたちは、最初は身体全体でリズムを取っていたが、徐々に立ち上がって筆者に近づき、身体を揺らし始め、気がついたときには弾く真似に至っていた。その表情は、全身全霊の笑顔であった。向き合って対峙した演奏であったので、左右逆転している子どももいたが、腕の動かし方は、筆者と揃えようと頑張っていた姿が印象的であった。

これらのことから、興味を持てば、子どもの音楽的素養を自然に引き出し高めることが可能であると言えるのではないか。遊びの中の自然発生的な音を誘発し、広げ、くみ上げつなげることから、子どもの身体能力を高められるのではないか。つまり子どもが興味を持てるような音楽に寄り添えることが必要と

いえる。

今回、イメージの共有においては、絵本の読み聞かせにおいては、発話が媒介として見られた。また、弾き真似においては、動きや物（楽器）によるイメージの共有が見られた。また、リラックスして聞ける環境構成が影響を与えていた。

12 運動会が終わっても踊りの曲が流れると（文責：八木 名菜子）

事例

筆者の息子が通っていた静岡市のU幼稚園では、運動会が毎年6月に開催されるのだが、3歳児、4歳児、5歳児の学年ごとに集団で音楽に合わせて踊りを披露する。練習は各学年に分かれて行われているのだが、練習後半に異なる学年が見学する時間が設けられていた。運動会終了後、一ヶ月ほど経っての参観会の時のことであったが、自由遊びで園庭に散った子どもたちを招集することもなく、運動会の踊りの曲が放送で流されると、それまで遊んでいた子どもたちが、その場で踊り出した。学年関係なく曲に合わせて、歌いながら踊っている姿に、筆者は目を見張った。興味深く感じたのは、学年の曲が聞こえると、本番の際に前後にいたであろう同級生同士が集まり、バラバラだったクラスが気がつくともまとまっていたことである。披露するための踊りも兼ねていたが、子どもを招集するきっかけにもなっていた。

考察

子どもはもちろん、人間は好奇心の塊である。尊敬し、敬愛する指導者や先輩たちの姿に憧れを持ち、一生懸命取り組む姿を目前にすることによって、自然に真似るようになる。否定されず、肯定されればそれは自信につながり、好奇心は連動していく。音は耳で聞くものであるが、視覚からも聞いているものと考えられ、経験や体験が疑似であっても「楽しさ」が優先されると形にできるものなのだとか考察される。もちろん信頼できる指導者あってのことで、褒めてもらえると更に飛躍し、上級に上がることを心待ちにするようになった。好奇心を刺激する声かけが多々見られ、驚く成長が促されているように感じられた。

運動会の踊りの曲は保育者による環境構成にあたり、イメージの共有がなされている。子ども相互においては、踊りとしての動きがイメージの共有の媒介となっている。

13 外部講師のリトミックにおける動きの共有（文責：八木 名菜子）

事例

静岡市のU幼稚園において、3歳児よりリトミックと称する時間が外部講師によって、月に複数回催されていた。ピアノ演奏でリードしつつ、動きの手本になるサブリーダーが園児の輪に入って指導を展開する。その際、保育者も園児の中に入り、子どもの手本になる動きを率先していた。パターンがルーティン

ンされているらしく、遊びの延長のように、講堂の中を音に合わせて飛び跳ねたり、寝転んだり、複雑なステップに挑戦したり、静と動が絶妙に組み合わせられていた。

考察

一定のリズムと動きを連動するために、身体能力の向上は欠かせないわけだが、園児がとにかく楽しそうな表情をしているのが印象的であった。音に合わせて歩いているはずが、走りだしたり、逆走したりしてしまう子どもが現れるとリーダーが諫めるより前に子どもたちが異を唱えられるように成長していった。園児の輪に入る二名の保育者は対角線上になるように、手本の際は輪の中心に入るように位置し、子どもの理解の妨げにならないよう、配慮もされていた。また、動きの一律は年齢が上がると安定してきていることも興味深かった。これらのことから、3歳児から音楽に合わせて身体を動かす素養を培っていたと推察する。音楽的素養は、様々なリズムを体験することから向上し、身体能力も伴うものと考えられる。

リトミックにおいて、子ども相互の動きがイメージの共有に影響していた。

14 観客参加の楽曲を通じた共同演奏体験（文責：八木 名菜子）

事例

筆者が演奏活動で行うルーティーンは、観客参加の楽曲を組み込むことである。L・モーツァルト作曲の「おもちゃの交響曲」はその一例であるが、これまでにT小学校、藤枝市郷土博物館、S大学主催はびねるカレッジなどにおいて、観客とのコラボレーションを実現している。小学校では事前に楽譜を配布して、6年生の有志（選抜された生徒）のリコーダーと競演した。その他の場所では、告知の段階で、笛の持参を呼び掛けた上、様々な笛を貸し出してその場で簡単な楽曲解説と練習を行い、一緒に演奏した。自分のお気に入りの笛や、好きに選んだ笛を使い、その場で楽曲を作り上げることが楽しめる上、演奏の輪の中に入り込むことができている。

考察

全三楽章からなる楽曲であるが、各楽章にかっこの鳴き声を響かせる楽しい楽曲であり、タイミングがずれてしまっても、繰り返し同じパターンが続くので、終わりには音がそろって結べるようになる。また、乳幼児は吹き続けることが難しいので、吸っても音が出る笛を用意している。「音を楽しむ」を聞くことに限定せず、見ることも、真似ることも、一体化することから周りと一緒に作り上げる過程そのものを遊ぶように導き出せた一例と言えるのではないかと。周りと一緒に遊ぶと楽しい、嬉しいが増幅していくのが表情から読み取れる。

一緒に演奏できる曲を組み込むことが、イメージの共有における環境構成に当たると考える。

IV まとめ

「保育の内容と理解」には、「子どもの生活と遊びを豊かに展開する」とあり「子どもの遊びを豊かに展開する」ことに注目した。今回は特に音楽や歌を使った事例について、「遊びが展開するのは『イメージの共有』がなされているときである」という視点に立って考察してきた。

全14の事例において、音楽や歌を使った活動においても、遊びの展開にはイメージの共有が見られた。このことから例えば一斉保育で歌の指導をするときであっても、普段から子どもたちが自由に遊んでいるときであっても、音楽活動にも「イメージの共有」を意識して、遊びの展開を観察し、支援することが必要であると考えられる。

V 参考・引用文献

- 1) 全国保育士養成協議会 (2017) 保育士養成課程等の見直しについて, pp.1-31
- 2) 松本秀子 (1996) 保育の質が遊びを決める: イメージの共有が遊びを展開させる, 日本保育学会大会研究論文集 49, pp.648-649
- 3) 向悦 (2017) 幼稚園児における共同遊びの展開—イメージの共有との関連—, 御茶ノ水大学子ども学研究紀要第5号, pp.69-79
- 4) 宮田まり子 (2013) 3歳児の積み木遊びについて: 行為と構造の変化に着目して, 保育学研究 51(1), pp.50-60
- 5) 砂川史子、無藤隆 (2002) 幼児の遊びにおける場の共有と身体の動き, 保育学研究 40(1), pp.64-74
- 6) 齋藤多江子 (2012) 1~2歳児の仲間と物とのかかわり—「仲間と同じ物に関心をもつ」行為に着目して—, 保育学研究 50 (2), pp. 96-107
- 7) 藤塚岳子 (2011) ごっこ遊びのイメージの共有を支える援助—共有要因の発達プロセスを捉えながら—, 愛知教育大学幼児教育研究第15号, pp.59-66
- 8) 秦昌子、梶間奈保 (2017) 幼児教育における子どものうた遊びの研究と課題, 人間と文化 1 巻, pp.81-87
- 9) 松原由美 (2016) 被虐待児の閉ざされた心を開く音楽遊び, 最新社会福祉学研究 11, pp.13-21

(2018年3月19日 受理)